びぶりおてか

同志社大学図書館報 No. 14. 1973. 7. 1

読　書　二　題

緒　方　純　雄
神　学　部　長

いとおしむように書をかかえて，さ迷ったり，旅に出たりした思い出は誰にもあるだろう。そんな書はたいていその折々の自分の心情とともに息づいていたし，自分を引き上げたり，引っぱり込むような高み，深みをもつものであった。私の場合そんな書は今ごろになると――戦前のものだから，体裁も紙質も今のものとは比べものにならぬし，地味であるがあるままに――書棚の片隅にひっそりかくれている。それに書き込んだ言葉やラインを私は誰にも見られたくない。自分が余りにも生まにあらわれていることからくる気恥しさ，照れがあるからである。それらは自分が見て，自分だけに通ずる言葉であり，ラインや記号である。見て，すぐにその折の心情が自分にかえってくるものもあれば，手間どってあれこれ考えたあげく，そうなるものもある。とにかく，そんな書き込みに心くばりながら読んで行くにつれて，その折の自分がよみがえってくるものである。

そんなことは感傷であるとか，懐旧の念にすぎないと云われそうである。自分でもそんな風に感じて，口にすることさえ憚ることもある。しかし，そんな場合私は初心を取りもどしたとか，何かしら自分を取りもどしたようにさえ感じる。特に自分がダレているとか，まどいを覚えている時など，この感覚は強い。こんな感覚について考えてみると，二つのことからくるように思われる。一つは心情と論理に関係しているようである。その折には，心情と論理は今のように別々になっていなくて，心情が論理を求め，論理が心情を求めるというような関係をもっていた。今では心情は余りにも歪少化され，論理をうむことをやめている。論理は心情を求めない程に自立し，高慢になってしまっている。カントの言葉をもじって云えば，心情なき論理は空虚であり，論理なき心情は盲目である。自分の人生の途上で出会った数々の問題は，自

分の存在全体をゆすぶっていた。ゆさぶられることによって，それらは先ず心情の問題となったし，同時に論理の問題となった。それぞれ呼応していたのである。今自分を取りもどしたように感じるのは，二つが別々になって自分を喪失しかけているからではないだろうか。存在の全体性の取りもどしが呼びかけられているように感じる。

もうひとつのことは，私たち人間が過程存在であり，存在を誕生から死へまたがらせて生きているからであろう。過去の自分は過ぎ去ってしまっているとか，済んでしまっているものではなく，今の自分をなりたたせているものである。このことは単に完了の事実ではない。今も続いていることである。人間は現にこのような過程とか形式をかかえ込んで生きている。過程存在といったのは過程を現にかかえ込んでいるような存在だからである。過去の自分を振り返ることによって，今の自分がピシッときまるとか，自分を取りもどしたように感じるのは，過去から今への過程を新たにふむことによって，自分がただされるからでもあろう。未来が，この未だ体験もしていないものが，自分を生かすとか，ただすことも起るのだから，過去によって生きることが，ただされることが，起るのはいうまでもない。過去へ帰り，過程を新たにふむことによって，自分が生きるとか，ただされることが，かつて読んだ書によって起るのではないだろうか。ワーズワースのMy heart leaps up にうたわれている the child is father of the Man もこんなことを云っているのかも知れない。読書をする時には，思い切り書き込みをし，自分を後に残すようにしたらよいだろう。もちろん，そんなに自分を打ち込めるような書を選ぶことが大事なことである。

次に，書の中には極限状況の書と云ってよいものがある。死に直面してとか，存在崩壊とかの極限状況の中で書かれたものである。フィクションもあれば，ストリーもある。異論があるかも知れないが，ドストエフスキーの「罪と罰」，「マクベス」，あるいは，最近講義で読んだボエティウスの「哲学の慰め」なども，そんな書だろう。極限状況において人間を知るということは，私たちに必要である。それは人生の知恵であるし，人生を覚悟をもって生きることにも通じている。今の時代はやはり覚悟をもって生きる時代でもある。

人間とは何かという問いは，人間の歴史とともにはじまっている。この問いにたいして，人間はさまざまに答えてきた。人間の本性を善とする立場があれば，悪とする立場もある。意志を人間の根底にすえながらも，ショーペンハウァのようにこれを悲観的に見る立場があれば，ニーチェのように肯定的立場もある。人間の根底を自然とする立場があり，理性，精神とする立場がある。自然とする立場にしても，ルソーのように肯定的に見るかと思えば，ホッブズのように悲観的否定的に見るものもいる。このような相違をあげれば限りがない。そして，それぞれの立場が可能であるのは，それが即しているようなリアリティが人間にあるからだとすれば，そんなリアリティをかかえ込んでいる人間は複雑である。昨年九月十六才の女子高校生が校舎の窓から飛降り，自殺した。友人間では「明るい女の子」，家の中では「いい娘だった。」遺書には「人間は強いように見えても弱いもの，ゾウのように大きく，それでいてアリのように小さいもの。機械より強いけど，野に咲くキクより弱いもの。人間ってあわれなもの。外の人にたよらず生きていけないなんて」と書かれていた。人間まさしく逆説的なものである。

この一つしかない，繰り返すことのできない人生をどのように生きるか。これを考えると，どうしても人間とは何かと問わざるをえなくなってくる。問うて行く中で，私たちはさまざまな答えとふれあう。それぞれが人間のリアリティに即しているのだから，それなりに説得力をもっている。そのようなリアリティに自分が生きている時など，特にそうである。しかし，次第に自覚してくる別のリアリティが，また別の答えへと自分を導びく。こうして巡礼にも似た探索を私たちは続けることになる。この探索には際限がないし，その上それぞれのリアリティが複雑にからみ合っているので，単一の，包括的な答えに到着することがない。探索は徒労に終り，断念される。たまさかに問いに燃えることはあっても，やはり諦らめに変って行く。

こんな中で極限状況の書を読むことは，ショック療法に近いし，昏迷から救ってくれる。思えば，私も随分そんな書を読んできた。詩歌もあれば，文学もあり，体験の書もある。教行信証，歎異抄なども——もちろん解説づきで読みはじめたのだが——ある。いずれもかなり自分を移入し，時間をかけて分りはじめたものである。こんな書を読んで，身を極限状況に移入して行くと，あれこれと迷い込んだ人間のリアリティ，それらに即する答えを，未だ極限に至っていないもの，日常的にとどまるものと見ざるをえなかった。文学作品の場合には，極限状況は事実というより，ありうべき事実として受けとめ，自分に確かめる努力が求められる。一方，ストリーとしては，前者が間接的であるのにたいして直接的であり，事実は紛れもないものとして自分にのぞんでくる。こんな場合，私はフィクションとストリーとを読み合わせていたようである。これは今でも変らない。恐らくフィクションだけでは，書かれている極限状況はポシブルではあってもリアルとまで受けとめるに至らず自分の脇を流れてしまうだろう。それはストリーによって裏打ちされて，リアルなものとして受けとめることができよう。人生を覚悟して生きるためには，このような極限状況の書，このような読み方をすすめたい。聖書はその一冊である。

教育(学)に関する二次文献について

社会科学のうちでも教育(学)に関する包括的な文献解説書は数少ない。こうした空白をうめる画期的なものとして，加納正巳著「教育学関係参考文献総覧」<帝国地方行政学会 昭和46>(㊐028.37;K)がある。多くはこれを参考にしていただければよいが，今回は本館に所蔵する資料のうち包括的，一般的なものを中心に収録した。排列は原則として出版年順としている。

1. 教育文献年表
海後宗臣著 <吉野作造編「明治文化全集」第10巻 教育篇日本評論社 昭和3 P.557-567>(㊐081;Y(10)),<明治文化研究会編 「明治文化全集」第18巻 教育編 日本評論社 昭和42>(㊐210.6;M5(18))
明治2年から明治23年までにわが国で刊行された教育書を逐年毎に収録し，書名，著者名，発行所を記載している。主なものには解題をつけている。

2. 明治文献目録
高市慶雄編 日本評論社 昭和7 P.47-53(㊐015.1;T2)明治元年から明治23年までに刊行された図書を網羅的に収録している。教育関係は教育一般・教育史，教育行政に分け約250点収録。

3. 教育学著述年表
<城戸幡太郎ほか編「教育学辞典」総索引 岩波書店 昭和14年 P.361-378>(㊐350.3;K(5))西暦元年より1930年までに刊行された内外の著名な教育学書を刊行年順に配列している。とくに著名な教育学者の著述を網羅しているので，その著述史を知るのに便利である。

4. 教育史年表
林友春・木下法也著<「教育学事典」第6巻 平凡社 昭和31 P.329-515>(㊐350.3;H(6))776BC.から1955の内外の著名な著述を収録している。

5. 初等教育者著書解題
初等教育奨励会編(文部省普通学務局内)昭和16 270P.(㊐013.3;S)
初等教育に従事する人々の著作418点を収めている。

6. 社会科学文献解題 哲学・教育篇
新島繁著 東峰書房 昭和24 488P.(㊐016.3;N(2))
古典的な教育文献23点を収めそれに詳しい解題を付している。

7. 明治以降教育文献総合目録
国立教育研究所付属教育図書館編 印刷庁 昭和25 380P.(教育文献総合目録 第1集)(㊐016.35;K2(1))
明治以降わが国で刊行された教育図書14,417点の総合目録。東京の主要な図書館・研究室，石川謙，海後宗臣，吉野作造三氏の個人の蔵書を収録している。各図書館は昭和24年3月，研究室・個人の蔵書は昭和23年8月現在の調査で8項目に分類し所在を示してある。本書はわが国では初めての教育文献総合目録でもある。

8. 教育史に関する文献目録並に解題
石川松太郎著 講談社 昭和28 242,10,23P.(㊐016.35;I2)
明治以降わが国で刊行された教育史に関する単行書を主体に収録している。一部紀要・雑誌論文も含め約2,000点を収め解題を付している。

9. 教育研究事典
石山修平ほか編 金子書房 昭和29 1514,22P.(㊐350.2;I)
アメリカのモンローの教育研究事典(Encyclopedia of educational research)に範をとったユニークな事典。各項目の末尾に戦前から昭和26年ないし昭和27年前半期までに発行された文献を付している。巻末に追加文献(22P.)がある。

10. 地方教育資料総合目録
国立教育研究所付属教育図書館編 東洋館 昭和29 105P.(教育文献総合目録 第2集)(㊐016.35;K2(2))
日本各地に所在する明治以降の地方教育資料 2,324点を収録したもの。前出した，**7.「明治以降教育文献総合目録」**とで明治以降の教育文献の大部分を知ることが出来る。

11. 戦後における教育関係論文目録——教職員・学生・海外教育——
国立国会図書館調査立法調査局 昭和29 70P.(㊐016.35;K3)
昭和21年から昭和28年12月までの邦文雑誌の関係論文を収めている。

12. 学術図書総合目録――教育学欧文篇――
文部省大学学術局篇　日本学術振興会　昭和31
110P.（㊐016;M3-7(4)）
昭和28年11月現在の調査に基づく全国54国公私立大学所蔵の教育学関係欧文図書約 3,000点の総合目録である。

13. 文学・哲学・史学文献目録　Ⅶ　教育学篇
日本学術会議第1部篇　昭和33　317P.（㊔028;N(7)）
昭和20年8月から昭和32年3月までに刊行，発表された教育全般にわたる学術図書・論文を収録している。雑誌論文については学会員の申し出たもの以外は収録していないが，教育全般にわたる書誌としては他に類がない。

14. 明治維新史史料・文献目録
<歴史学研究会編「明治維新史研究講座」第6巻　平凡社　昭和34　P.237-244>（㊔210.61;M2(6)）
明治23年から昭和32年までに刊行された教育史関係文献を収録している。これ以後の昭和34年から昭和43年に刊行された文献は<「明治維新史研究講座別巻」増補＝明治維新史史料文献目録　平凡社　昭和44　P.211-224>に収録されている。

15. 戦後史文献解題　(3)　文教
田坂二郎著<国立国会図書館「レファレンス」102　昭和34年7月　P.101-111>（㊔P051;R2）
戦後刊行された戦後史文献のうち文教関係33点に解題を付したもの。

16. 教育図書雑誌の筆禍目録
木戸若雄著<「日本古書通信」24巻6号　昭和34　P.6-8>（㊔P023;N）
官憲によって発売禁止処分をうけた著作物を明治以降より収録。ただし小・中学校教員を対象とした図書，雑誌に限定している。

17. レファレンス文献要目
第1～2集　国立国会図書館調査立法考査局編　昭和35～36（㊔028;K(1～2)）
調査立法考査局が調査を依頼された諸問題を収録し関係文献を紹介している。

18. 日本教育参考図書・文献目録
<大佐三四五監修「教育資料の検索と活用」山本書店　昭和36　P.439-443>（㊐029.4;A）
教育参考図書を収録したもの。一部雑誌論文も含んでいる。

19. 文部省出版書目
<明治文化資料叢書刊行会編「明治文化資料叢書」第7巻　書目篇　風間書房　昭和38　P.509～526>（㊐081;M3(7)）
文部省及び旧大学南校東校編輯寮において刊行した教科書，教育書などを収録している。

20. ユネスコ出版物目録
<京都国連寄託図書館編「国連専門機関刊行物目録」(上)　昭和39　P.3-56>（㊔027.2;K(1)）
国連専門機関ユネスコ設立以来出版した16頁以上の出版物の目録である。これに続くものとして京都国連寄託図書館編「国連資料年鑑」（㊔027.2;K3）があり，当該期間のユネスコ出版物目録が収録されている。

21. 文部省刊行物の紹介
文部省図書館　<国立国会図書館「びぶろす」15巻7号　昭和39年7月　P.16-23>（㊔P010.1;B）
文部省から戦後刊行された主な単行資料と続刊中の逐次刊行物を紹介している。

22. 日本の参考図書　改訂版
日本の参考図書編集委員会編・刊　昭40　P.196-201（㊔028;N2-LA）
教育関係参考図書47点を収録し，解題を付している。昭和44年に刊行された<「日本の参考図書」補遺版　P.148-153>にも「改訂版」以後刊行された関係参考図書を収録している。

23. 資料・戦後二十年史（5）教育・社会
海後宗臣，清水幾太郎ほか編　日本評論社　昭和41
273，384P.（㊔210.76;S(5)）
第2次大戦後20年の重要資料を集大成したもの。教育篇は教育政策，教育制度，教育実践，教育運動，教育理論に大別し収録している。

24. 教育学研究入門
細谷俊夫，仲　新編 東京大学出版会　昭和43　375P.（㊔371;H4）
巻末に「教育学一般の文献」として，教育事典，文献目録，年鑑などが収録されている。

25. 参考図書所在目録
参考図書所在目録編さん委員会編　日本私立大学協会　昭和43　P.300～316（㊔028;N4）
全国の私立大学図書館137館に昭和40年7月現在所蔵する和文参考図書の総合目録である、P.300-316に教育関係参考図書が収録されている。

26. 教育学関係参考文献総覧
加納正巳著　帝国地方行政学会　昭和46　175P.（㊔028.37;K）
戦前より昭和43年12月までにわが国で刊行された教育関係の書誌・目録，索引，抄録および資料などを約850点収録し，詳しい解題を付している。巻末に索引あり。唯一の新しい教育関係の文献目録である。

27. 文科系文献目録　XⅫ(上)教育学篇
日本学術会議第1部編　昭和41　229P.（㊔028;N-2(22:1)）
前出の13.「文学・哲学・史学文献目録　教育学篇」に続く昭和32年から昭和45年までに刊行あるいは発表された教育学術研究書論文を収録している。

28. 国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録
第2巻　国立国会図書館　昭和47　P.661-826（㊔029.11;K4A(2)）
国立国会図書館に所蔵している図書で明治期に刊行された5,054タイトルの教育関係図書を収録している。

同志社大学図書館の歴史　（その7）

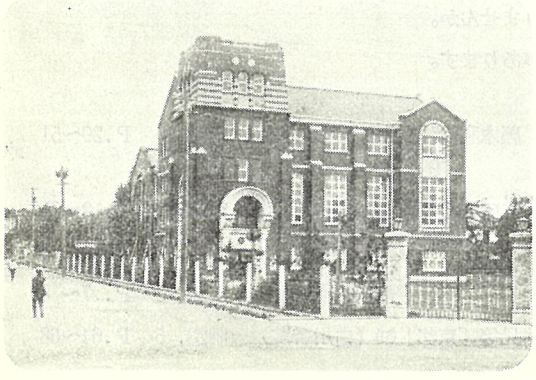
新図書館の建設 —3—

1918（大正7）年，図書館本館の建設が新図書館建築計画の第2期工事として着手され，9月17日には午後0時30分よりその定礎式が図書館建築委員島原逸三神学部助教授の司会で挙行された。式はまづ鈴木吉満中学長事務取扱（同志社教会教師）の聖書朗読に始まり，安部清蔵宗教主任（同志社教会牧師）の祈祷，続いて原田助総長の建築始末報告があり，さらにラーネッド博士の定礎祈祷があって，記念の品を納めた鉛のカプセルが埋め込まれた。それは同志社としては最初の5階建のビルディングにふさわしい盛儀であったといえよう。建坪118.82坪（約392㎡），延648.54坪（約2,140㎡）鉄骨煉瓦造5階建，設計は第1期工事の書庫と同じくヴォーリスによるものである。

この新図書館建築のために校友山本唯三郎は前後合わせて89,799円27銭という当時としては巨額の寄付金を一個人で寄せられ，ほとんどそれによって成ったものであることは銘記されるべきであろう。すなわち，総工費90,071円26銭，残余もすべて寄付金によったものでそれは黒沢貞次郎の1,076円19銭，田中勇助の20円，吉田金太郎の121円，林源太郎の314円75銭および法学部3年阿部清己ほか学生87名の寄付金440円がこれにあてられたのであった。しかし当初予算は総工費86,490円33銭であったが，第1次世界大戦後の物価高のなかでは予算を超過し結局3,580円93銭が増額され，ようやく1年半を経た1920（大正9）年3月31日一応の竣工は見たが，なお室内設備などの完成がおくれ5月10日になって教職員・学生多数の参加のもとに開館式が新図書館内の大閲覧室で行なわれるに至ったのである。

そのゴシック様式を取り入れた鉄骨煉瓦造5階建の雄姿は当時の京都人の目を見張らせるにも十分なものであったし，待望久しいこの新図書館は丁度この年4月，大学令による大学となった新生〝同志社大学〟の門出を祝福するかのように今出川原頭にその偉容を現わしたのである。そして，さらに翌1921（大正10）年にはこの新図書館屋上に鉄製の旗竿が取り付けられて以来久しい間，同志社の記念日など，ことあるごとにそこに同志社の社旗がへんぽんと翻ることとなるのであるが，このことはこの建物の同志社での位置づけを象徴するものでもあった。この新図書館の内部は1階に閲覧室，宿直室，小使室（用務員室），2階に大閲覧室，事務室，3階に館長室，会議室が設けられ，4階は法学部研究室にあてられ，5階には宗教博物館および倉庫が設けられた。そして，さきに第1期工事として建てられ，一時は書庫兼閲覧室および研究室として使用していたものは当初の計画通り純然たる書庫に改装されるとともに2階建の渡り廊下で本館と結ばれることとなった。

当時は時あたかも第1次世界大戦後の経済界の圧迫によって同志社の経営そのものが困難を極め，そのしわよせは図書館の図書費に顕著に現われ，学生数は増加したが図書費の増加はそれに伴わず，特に1920（大正9）年度の如きは図書館の図書費が極端に減額されたのであったが，それにもかかわらず蔵書冊数は順調に増加した。すなわち第1期工事完了の1915（大正4）年度には33,150冊であったものが新館完成の年には47,097冊となり，1923（大正12）年度には遂に50,000冊を突破したのである。これはその多くが寄贈図書であったことを物語るのであって，このことは注目に値すると同時に感謝しなければならないことの一つである。



なお，この新図書館が竣工して，1887（明治20）年に建造された旧図書館は久しい以前から教室として使用され，当時は通称を〝大学予科教場〟と呼ばれていたが1921（大正10）年2月1日，あらためて〝有終館〟と命名され今日に及んでいる。

実例を中心とした

資料のさがしかた—5—

——郷土関係（京都市）を中心に——

郷土関係即ち京都地方に関する資料についていろいろの質問があるので今回はこれをとりあげてみました。
京都地方に関する資料について最も参考になる文献としては次のものがあります。

(1) 京都府資料所在目録 ㊫025.16 K

(2) 京都府関係雑誌論文目録 ㊫025.16 K 2

〝京都府資料所在目録〟は京都府の過去及び現在を知り，将来の発展に役立てるため，京都府下の公共図書館，大学図書館，学校図書館ならびに府外の主要図書館の所蔵する資料，および公開されうる個人所蔵の資料を昭和41年3月31日現在で8，439タイトルを調査し収録されたもので地域資料の所在を明らかにし，利用の便をはかることを目的として京都府立総合資料館が他の図書館や大学の協力を得て編集発行されたものであります。この目録の分類は〝京都府資料地域区分表〟により地域で分類し，地域のなかは日本十進分類法に準じて主題で排列されています。

〝京都府関係雑誌論文目録〟は〝京都府資料所在目録〟にひきつづいて京都府総合資料館によって編集発行されたものであります。内容は昭和44年12月迄に発行された雑誌から京都に関する論文12,529件を収録し主題分類したものであります。索引として地域索引，事項索引および著者名索引があります。

〔質　問〕 やすらい祭について何を見ればよろしいでしょうか。

〔解　答〕 〝京都府資料目録〟を見ると次の資料があります。

京の年中行事 ㊫386.81 K

京都府資料目録には資料の所在場所が記載されていますので非常に便利です。

次に〝京都府関係雑誌論文目録〟を見ると次のような雑誌記事があります。この雑誌論文目録には雑誌の所在場所が記載されていませんので不便です。然し学生諸君がその雑誌を必要とされる場合には所在場所を調査し，所蔵館に閲覧依頼状を発行します。又この目録には雑誌記事の頁数も記載されていますので利用の場合非常に便利です。

i）やすらい祭　明石染人「郷土趣味」(3) 大7.3 P.13～16

ii）京紫野今宮鎮花祭歌について　浅野健二「山形大学紀要-人文科学-」2 (3) 昭28.3 P.119～P.138

iii）今宮やすらい祭の風俗　江馬　務「風俗研究」(8) 大6.5 P.7～9

iv）今宮やすらい祭　薮田嘉一郎「京都史蹟」(18)（京都史蹟会） 昭31.4 P.1～2

v）京の奇祭「やすらい祭」　和田　敏「京都」(30)（白川書院） 昭28.4 P.12～18

〔質　問〕 京都の扇子とその産業について適当な図書はありませんか。

〔解　答〕 〝京都府関係雑誌論文目録〟を見ると次の論文があります。

i）京都市の発展と同業者町について
—扇子業同業者町からみた—　藤本利治「立命館文学」(149) 昭32.10 P.29～51

ii）京都市の扇子製造業（1-3）
立命館大学商工経済研究会「京都商工情報」(45) 昭36.12 P.12～81

iii）扇子御売業者との懇談会　「京都商工情報」(1) 昭25.12 P.7 ～ 8

iv）その後の扇子業界（診断報告より）　「京都商工情報」(3) 昭26. 3 P. 7～ 8

v）京扇子を語る ＜座談会＞　中村清兄等「京都」(31)（白川書院） 昭28. 5 P.64～68

〔質　問〕 〝車石〟について何か資料がありますか。

〔解　答〕〝京都府関係雑誌論文目録〟に次の論文があります。

車石:京都三街道における運送施設の考察　水谷清三「地理学評論」 30 (6)　昭32.6　P.33～P43

〔質　問〕京都の町名について何か資料がありますか。

〔解　答〕〝京都府関係雑誌論文目録〟に次の資料があります。

i) 京都の町名……(町名分類)
阪倉篤太郎「京都女子大紀要-文学部-」 (15)　昭32. 7　P. 1～P.11

ii) 京都における地名考
辰馬　六郎　「京都」(21) (白川書院)　昭22. 7　P.13～P.15

iii) 京都名地区呼称とこれのもつ歴史的意義
田中　文雄　「古 代 文 化」12 (1)　昭39. 1　P.17

iv) 京を語る (2)……町名について
田中　緑紅　「平　安」18 (3)　昭27. 3　P.48～51

v) 京都と地名　川勝政太郎　「史 迹 と 美 術」18 (7)　昭23.10　P.277

vi) 京都街路の名　川勝政太郎　「京　都」(21) (白川書院)　昭27. 7　P.7～ 9

vii) 京都市の町，町名，町界および番地について
光明正道著　「都　市　問　題」23 (4)　P.165～187　23 (7)
P.97～111　昭11.10　昭10.12

viii) 京 の 町 並　秋山　国三　「国文学解釈 鑑賞」27 (4)　昭37.4　P.175～182

〔質　問〕明治初年京都における舎密局について何か資料がありますか。

〔解　答〕次の雑誌記事を見て下さい。

i) 舎密局・染殿・織殿など
明石　染人　「洛　味」(71) (新生)　昭33.3　P30～34

ii) 京都舎密局 (1-3)　川崎近太郎　「科学主義工業」 5 (12)　昭16.12　P.201～205
6 (1)　昭17.1　P.266～271
6 (2)　昭17.2　P.108～119

iii) 明治初年京都府の新産業政策と明石博高
吉川　秀造　「経済史研究」26 (2)　昭16.8　P.1～21

〔質　問〕京都に於ける地震について資料をさがしています。

〔解　答〕次の雑誌記事をみて下さい。

i) 近畿地方の地震活動について
今村　明恒　「建 築 と 社 会」12 (2)　昭 4.42　P.145～157

ii) 京都大地震略史　横尾　義貫　「建 築 研 究」(14)　昭23. 1　P.12～22

iii) 京都および付近の大地震
大森　房吉　「震災予防調査会報告」(57) 明40.2　P.43～51

iv) 京都の地盤と震害　横尾義貫・宮川久三「京都大学防災研究所」(12A)昭44.3　P.463～476

v) 京 都 と 天 災　堀江　保蔵　「経 済 史 研 究」(19)　昭 6. 5　P.101～105

〔質　問〕明治初年の京都府知事槙村正直について何か資料はありませんか。

〔解　答〕次の記事を参照して下さい。

i) 槙村正直小考　寺尾　宏二　「経 済 史 研 究」20 (3)　昭13. 9　P65～76

ii) 吊槙村男爵薨逝　「京都府教育雑誌」(49)　明29. 5　P.1～2　P.14～17

iii) 明治政権確立の一過程　―明治6年槙村正直拘留事件を中心として―　戸祭　武
「舞鶴工業高等専門学校紀要」(3)　昭43. 1　P.65～88

ピックアップ

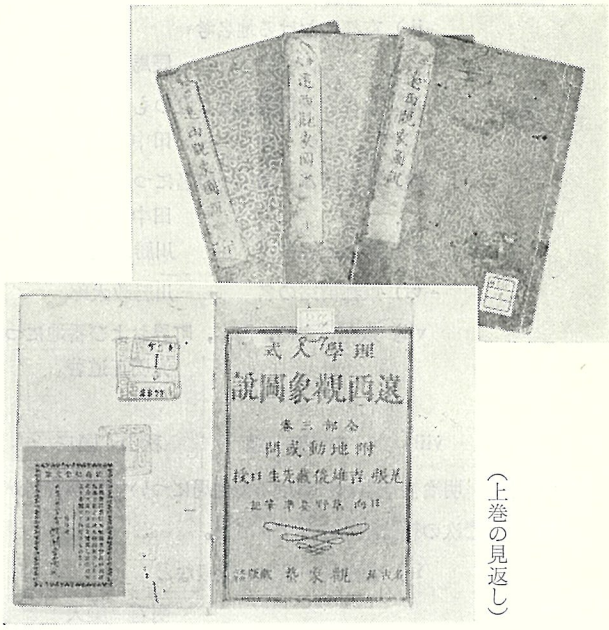
遠西観象図説

江戸時代の後期には，長崎を通じて海外との交流も盛んとなり，それにつれて，洋学の研究も発展し，多くの洋書が翻訳された。

天文学に関しても，地動説を中心に多くの書物が刊行されたが，本書も当時の天文学研究を知る上では，貴重な資料の一つである。

著者，吉雄俊蔵は，長崎の有名な通詞で蘭医の吉雄耕牛の孫として天明7年（1787）に生れた。名は尚貞。南皐（なんこう）または観象堂と号し，俊蔵のちに常三（じょうさん）と称した。蘭学を学び，後年尾張藩医となってから名古屋における洋学発達の端緒をひらいたと云われている。砲術にも詳しく天保14年（1843）火薬製造の実験中爆死した。時に57才であった。

本書は，俊蔵の門弟，草野養準が師の口授を筆記したものである。原稿は，文政4年（1821）にできあがっていたが，同6年（1823）俊蔵が巻末に付録「地動或問」の一編を付加して，全3巻3冊で刊行した。2年後には，大阪から補刻版が出されている。



（上巻の見返し）

内容は，養準の題言によると，〝此編ハ西洋究理諸書数部ヲ訳定シ其要ヲ資スルニ成レリ。然レトモ馬児珎（マルチン）人名　馬盧（マルチ）蠻涅杜（ネット）人名ノ両氏ノ説ニ拠ルモノ尤多シ……〟とあり，西洋天文学説の概要をとりまとめたものである。さらに〝本編ハ純ラ地動（セカイガマハル）ノ説ニ拠リテ太陽ハ中央（ヒマンナカ）ニ位シ地（セカイ）ハ五星ト共ニコレヲ旋転（メグル）スルノ象（カタチ）ヲ示ス……〟とあって，地動説を中心として新しい天文学を分り易く説いたものである。なかでも興味深いのは，上巻の〝天象図〟である。天動説および地動説による宇宙系のモデル図，太陽の黒点図，月面図，などを紹介しながら説明している。巻末の「地動或問」は，問答のかたちで簡単に地動説を説いたものであるが，俊蔵が西洋の学問を中心としながらも，中国の学問に深い関心と尊敬を払っていることがうかがえる。

俊蔵のように家業の医学以外の天文学，その他の諸科学をひろく研究しているのは，当時の洋学の特色を示しているが，本書の如く西洋天文学を紹介することによって，天文方および専門の天文学者がそれを吸収し，明治維新後まもなくの太陽暦への改暦の気運に一役貢献したと云えよう。

本書は，新島紀念文庫（びぶりおてか No 6 に紹介）の蔵書として，篤志家鰐淵幸髙氏より寄贈されたもので，全3巻揃えているのは全国でも数少なく当館では貴重室に所蔵している。

〔参考文献〕日本学士院編：明治前日本天文学史，1960.

あとがき

〝びぶりおてか〟14号をお届けいたします。

過日，故同志社理事長　秦　孝治郎氏夫人　秦　善恵氏を通じて，蔵書，「賀川豊彦全集」他80冊の御恵贈に接しました。御芳志厚く御礼申し上げます。

"びぶりおてか"　同志社大学図書館報　No. 14　1973年7月1日　発行

発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 211－2311

編集責任者　前　川　嘉　門